

●れんさいエッセイ

Yakakoの神戸はKOBÉ〈8〉

出会の ドラマ

小原 稚子〈小原流理事・国際部長〉



絵／上尾忠生

私はおいしいものを食べることが好きだ。人一倍好奇心は強い方だから、どんな種類の食べものにも一応は挑戦してみる。たいがいのは食べられる自信もある。食べることは、私の情熱の一つでもあるのだ。

料理を作るのも好きだ。ほとんど東京にいるので、接待やつき合いも多い。だから、毎日キッチンに立つわけにはいかない。けれども、時間さえあれば、いつでも自分の食べたいもの、作りたいものを料理する。親しい友人たちに来てもらって、食べてもらうこともある。料理するひとときというのは、ストレス解消になり、私の大切なリフレッシュの時間でもある。

そういう時に作る料理はさまざま。気が向けば本格風西洋料理のコースであったり、稚子式お惣菜だったりする。私は料理をならったことがない



ので、分量を測ることはまずない。どんな味になるかと思うと、楽しみでワクワクしてくる。

ところが、手料理でお客をするとなると、懐石風料理になるのだ。いや、曲りなりにも客料理として出せるのはこれだけだと言う方が正しいかも知れない。

じつを言うと懐石料理は、私の料理に関する“原体験”と言ってよいものである。

子供の頃、まだ小学校に入る前のことだった。私の家では、暮のうちに用意するおせち料理は、祖母や母が中心になって作っていた。母たちがお正月の何日も前から忙しく立ち働く姿をみてると、いやが上にもお正月がくるという一種の晴れがましいような気分になったものである。そして、子供なりに少しは手伝わせてもらうと、“参加する喜び”で胸がいっぱいになったのを覚えている。

お正月の客のためには、懷石料理の『吉兆』に出張料理を頼んでいた。まだ若かった御主人の湯木貞一さんが、一番弟子の中谷文雄さん（現在『味吉兆』店主）を連れてきて、テキパキと器の用意をしたり、料理にかかっていた姿が、子供心にも印象的であった。

吉兆さんがあらわれる時は、いつも晴れがましい時だった。家中がきれいにされ、華やいだ雰囲気漂った。私は台所によくもぐり込んで、湯木さんが指図したり、盛りつけている光景を見ていたものだ。

とくに、お正月は華やかだった。小原流の高弟の人たちを含めた大勢の新年の客のために、座敷の襖ははずされ、部屋をつなげて大広間が用意された。畳には青い毛氈が敷きつめられ、床の間には父の初生けの格調高いいけばなが置かれ、おめでたい軸が掛けられた。そこに盛装した客たちが坐った。長女で当時はまだひとりっ子だった私は、かなり小さい時分からこういう席に坐らせてもらっていた。そこへ懷石料理のお膳が次々と運ばれてきた。

懷石料理は、季節感と、それを伝える趣向に特色がある。美しい器に、材料を最高に生かしながら、どう季節感を盛るか。なんとか相手をアツと言わせた。そこに料理人は苦心する。客にとっては、なにが出てくるのかな、という楽しみと期待は大きい。期待されてこそ、作り手もいっそう張り切って工夫を凝らすのだ。

子供心にも「この器のふたを取るとなに出てくるのかしら」とワクワクしたものである。そこには、いつも期待をこえた驚きと出会いがあった。

作り手のイメージの豊かさに出会い、そこにあらわれた季節感に出会う。最高に手をかけながら、それでいていかにも「自然らしい」料理。私にとって、懷石料理はつねにドラマティックであった。

とくに、間もなくして新年の宴はホテルでするようにってしまったから、子供時代の何年かのお正月の経験の印象はいっそう強く私の脳裏に焼きついている。青氈を敷きつめた清々しさ、それでいて華麗だったお正月の光景と懷石料理は、離れがたい印象となって心に残っているのである。

懷石料理は「目で食べる」という意味では世界最高の料理だと思う。器も盛りつけも演出も、すべてが味に関わっている。味も含めて一つのイメージを生かすために、材料の多くが捨てられる。その意味でも、最もぜい沢な料理だ。この懷石料理にあらわされる季節感というものは、日本人の持つ自然観とも深くつながっていると思う。

私は、とくに深く厳しく「自然」を観る環境に育ち、また、今や日本一といわれる湯木さんの豊かなイメージで作る料理に触れていた。こうして子供心に強く焼きついた日本人としての自然観は、長じて西洋を知るようになると、いっそう鮮やかに甦えてきた。その差が見えてきたと言ったらよいだろうか。東洋と西洋のその差に気がつけばつくほど、私のうちに眠っていた感覚が頭をもたげて、私を日本へ回帰させたと言ってよいだろう。人間は、自分の「原体験」に深く関って生きていくという。その意味では、私も、子供時代の、あの懷石料理が与えてくれた「出会い」の喜びとドラマに今も深く関わっていると言えるかも知れない。

モダニズムを生かせ神戸

草柳大蔵

〈評論家〉

日本文化デザイン会議は知的屋台のようなもの

——11月24、25日に日本文化デザイン会議が神戸で行われたんですが、今回の神戸で四回目になりますね。第一回目の横浜以来、変化はありますか。

草柳 随分変わってきましたね。第一回の横浜は試運転だったし、この会議の存在を社会に認知してもらうためお祭りの要素もたくさんありました。パフォーマンスや

演出が重要視されましたね。そのときのテーマは「文明と文化の共生」、ということでした。

第二回目は仙台。「北の文化」ということで風土ロジックという造語も生まれました。北と南の文化圏の違いを、使用されている材料で比較し、論じたりしました。

第三回は金沢。テーマは「遊び」。その「遊び」も労働と対立した意味にとらえるのではなく、生産的な行為としての「遊び」があるのではないかと、逆の発想からア



「日本人は文化性があるとか、他人を思いやるとか言いますが絶対嘘です。それはこんなに豊かな時代だからそう言ってるだけでね」

ブローチしたのです。

そして神戸が「海」です。だから打ち上げ花火から内容が次第に詰まってきたといえますね。地元のマスコミも単なる報道でなく、参加し創造しようとする姿勢になってきましたね。会議への参加者も増えましたし。

——分科会が同時時間帯に幾つも進行するので、もったいない気もしたんですが（笑）。

草柳 それがつめなんですよ。これは屋台なんです。文化の屋台でしょね。ちよつと食べておいしくなければ次の屋台にいけばいい。普通のシンポジウムは垂直のバラダウムになっているが、これは水平のバラダウムになっている。そこがおもしろいと思うんです。

——そうでしたか。水平思考をすればよかったんですね。ところで、文化の時代と言われていますが、経済や行政面から文化への投資がもつとなされてもいいと思うのですが、いかがなものでしょうか。

草柳 そうなんですよ。ここにあるプロジェクトがあるとする。そのプロジェクトが達成したなら当然そこにメリットがきますわね。すると次にはメリットを考えない投資をしていけばおもしろいんです。ところが実情はメリットの再生産をしようとする。三年なら三年、沢庵を食って我慢するとしますわね、三年たてば週に一回うなぎのカバ焼きを食べるようになるかと思えば、また沢庵の日々が続くという状態ですね（笑）。

もともと経済というのはデイスマルなもので文化現象の一つに過ぎない。ケインズが言ったように、経済学や経済政策の目標は、生産水準を決定している要因は何かということとトレースしていくのが本当なんです。その要因は文化で探るものなんです。ところが現状は、生産水準を上げることだけに、みんなが知的なエネルギーを使ってしまうっている。経済が文化現象の大部分のような誤解をしているんですね。

——原因はどこにあるのでしょうか。

草柳 終戦直後、日本の経済力は戦前の経済水準の一二

・六割しか残らなかったのに、二八〇万人からの復員の軍人と引揚者が帰ってきた。餓え死にさせず、社会を安定させるためには経済を興さなければならなかった。いわば坂の上の雲を見つめて歩いてきて39年には達成したわけです。その時に文化や教育こそが生産要素に入るんだ、という考え方にしてもよかったが、経済成長率は麻葉みたいなもので、絶えず成長していないと不安になる。だから四割伸びても低成長だ、などといって嘆き悲しむのです。

——イギリス人なら不景気はサンドイッチを食べながら待つ、と言いますからね（笑）。

日本人には原理がないから：

草柳 僕は先日ヨーロッパをまわってがく然としたことがあるんですよ。

そのときパリでは一フランが三十二円、ローマでは一〇〇リラが十六円でした。僕が13年前に「世界王国論」を書くためにまわったときは、一フランが八十五円で、一〇〇リラが六十五円。だから三分の一、四分の一に通貨が下がっている。にもかかわらず、彼らはフランス料理やスパゲティボンゴレなどのごちそうをスマートに食べている。その上、夜はお芝居やコンサートなどを楽しんでるんですよ。

これを見てズキッとした。この比率が日本だったらどうなるかと思つて。この通貨水準なら、一ドルが千円か八百五十円だ。こんなインフレになって、彼らのように自己完結的で、安定した毎日が送れるだろうか。

僕は昭和20、21、22年の食糧がなく、交通が途絶えた時代を知っているんです。日本人は文化性があるとか、他人を思いやるとか言いますが絶対嘘です。それはこんなに豊かな時代だからそう言っているだけですね。僕は軍隊から復員してきたときに「俺は何のために戦ってきたんだ。こんな民族のために命がけで飛行機に乗ったんだろうか」と思ったもの。だから自分の中に民族を見

ていく「ものさし」があるから、日本が今、ローマやバリ並みになったらと思つてズキツとしたんですよ。

——考えさせられますね。ヨーロッパの人たちはどうしてそんなふうに住生活できるのでしょうか。

草柳 大体三つぐらいのことが考えられます。

一つは社会資本投資が済んでいる。植民地経済が長かったからです。二つめはキリシ教原理がまだ生きていることです。日曜日には六八%の人がミサに出かけ牧師さんの話を聴いている。三つめは、子供の時から他人は他人、自分は自分という自己原理の教育がなされていることです。日本のように隣のうちがどこそこへ行ったからうちも行く、というような他人性志向で働いてない。

逆に言うと、日本は原理がなく、自由だったから成長が早かったんですね。しかし今度は成長とか変化とかが原理になったもんだから、成長や変化がないと大変不安になってくるんですよ。

ハイテクを三つのカテゴリーで考える

——ハイテクノロジの進歩は目ざましいものがありますね。光ファイバーやパソコンなど。私達はどうやって対応したらいいのでしょうか。

草柳 ハイテクノロジという一つの言葉、概念でひっくくしてしまうからわかんなくなるんですよ。三つぐらいのカテゴリーで考えれば簡単です。

まず道具として考えるカテゴリーです。光ファイバーとかパソコンは人間にとつては道具なんです。カメラにしても昔は2眼レフで、あれこれ調整して撮したらピンボケだったのが、今はバカチョンで誰でも簡単に撮せるようになった。これもハイテクです。技術がより優秀になり洗練されてきたということです。

次のカテゴリーは新素材です。飛行機はジュラルミンと決まっていたが、今はほとんど炭素、カーボンブラックをはりつけています。材料も軽くなり、燃料も使わずに済み、コストが安くなってきた。入歯の例をあげます

と、入歯というのは寝るときはずしますね。それは苦しいからです。何故かという、人間の身体の時軸というのは垂直に動くのですが、入歯は直角に入っているからです。物を噛む行為は垂直ですが入歯は直角に入っている。

それを京都セラミックなんかで、サファイア療法といって、セラミックの入歯を作り、顎骨に穴を開け埋めるようにした。垂直軸に入るから物を噛むのも楽だし、口筋がよく発達して情報回路が開けるものだから、呆けない利点もあるんですよ。

また東レが開発して世界的ベストセラーになったコンタクトレンズがあるんですが、これは酸素を通すんですね。それまではプラスチックだったから目が充血したものです。当然です、空気を遮断するのですから。眼医者に「見えないよりはいいでしょ」と言われる始末だった。人間が技術に従ってなければいけなかった。

今は技術と人間が親和する時代です。人間と親和する技術だけが生き残るでしょう。

——三つめのカテゴリーは何ででしょうか。

草柳 遺伝子工学の問題です。かつて世の中に存在しなかったものが出てくる。ことに生命体として出てくる。Aの生物グループの遺伝子を、Bのグループにいれて生物の生産効率をよくする、それによって新しいCという生物を創るんです。

未確認ですが、アメリカではアフリカ象と同じ大きさの牛を作ったと聞いています。またハイブリッドライスなんていうのは、米の遺伝子をいじることによって一挙に二倍半の収穫量をあげてしまっています。

——問題はないのでしょうか。

草柳 生物である以上、必ず病気をするか、風水害にやられたりする。すると全滅する怖れがあるんです。今までは遺伝子に多様性があったから、黒白の牛もいれば、赤牛もいる。肥育の悪いのやら、霜降りがいいやつなど、ある種が病気でやられても、他のは生き残ってくれる。

だから我々と共存できたわけです。

秀才ばかり創ると、何かの事情で地上から抹殺された場合、我々は鈍才ばかりで生きていくことになる。

「ふぞろいの林檎たち」ならぬ「ふぞろいの遺伝子たち」ですね（笑）。

草柳 優秀な遺伝子を残す思想はヘタをする人間にも及ぼされる。いわゆるホロコーストの思想です。ヒットラーがドイツ民族だけで、ジギスカンが蒙古民族だけで、というのと同じです。これは一種の精神病でしてね、「天才病」というのかな。天才、秀才が陥りやすくフェイズ・4（視野狭窄）というんです。

以上、三つぐらいのカテゴリでハイテクノロジイを考えればいいと思います。その中で、遺伝子工学の分野が今後我々にいかに迫ってくるか、いかに対処するかということになるでしょう。

美意識で材料と親和する

草柳 一つ言いたいのは、バカチョンカメラではみんな一緒になってしまう可能性があるんですよ。人間の精神がフラットになる怖れがある。たとえば仏像を撮るとき、仏像のもっている内面的なもの、仏像を彫ったノミの確かさ、あるいは祈りの深さといったものがバカチョンで撮れるだろうか。撮れないと思うんですよ。やっぱり土門拳とまでいなくても、マニュアルのカメラを使って、ピントを合わせ、ライトを工夫し、一日のうちの光線が仏像にさす瞬間を狙ってシャッターを押す。それがそいつの文化になるわけですよ。

するとハイテク時代における逆説として、アルチザン、つまり職人のサバイバルも十分可能性があるわけですね。

草柳 何がサバイバルかというと「美意識」だろうね。

例えば僕は、原稿を書くとき必ず鉛筆を使うんです。消しゴムを使うからマスマ目にピシッと入る。行数計算が早い。印刷所では活字が拾いやすいから、僕の前稿が一番遅く入って一番早く出る（笑）。ということはそれだけ取材時間が長くできるわけです。

さらに鉛筆を削る場合は小刀で削る。小刀は熊本に発注して作った「肥後の守」です。自分の好きな長さに削れるし、きれいに削れる。この「肥後の守」の芯はベルギー製のステンレスなんです。これに日本の軟鉄をくっつけ研ぐんです。これで削ると鉛筆の芯をザクッと切ってしまうことがない。

これがノウハウですね。使い回しですね。この使い回しが「美意識」だと思います。この「美意識」をもって材料と親和していく。親和していけばどんないい作品が生まれると思います。

僕の好きな画家に、雪の絵ばかりを描く富岡惣一郎さんという人がいます。彼の絵を見たり、話を聞いたりしてびっくりしたことがあります。あの絵のキャンバスはオランダの麻なんです。福島県でも麻はとれるがオランダから輸入する。なぜなら麻の繊維が長い。日本のは短いです。そして輸入した麻を京都の西陣へもっていった、キャンバスを織ってもらいます。どうしてそうするかというと、日本製のキャンバスの場合、表面にブツ



ブツがあるからです。雪にブツブツがあるわけないじゃないか、やっぱり一面の雪じゃなきゃいかん、です。

次にパレットですが、市販のパレットだと短いものだからスツと伸ばせなくて、雪に段がついてしまう。だから長いパレットが必要なわけ。そこで、東京の目黒に唯一人残っている刀鍛冶にパレットを打ってもらって長くなるんです。

だから彼が絵を描き始めるのは、西陣からキャンパスが届き、刀鍛冶のパレットを手にしてからです。その間彼はジョギングをして体力作りをしているんです。雪の絵を描くためには雪の中を歩かなければなりませんからね。今は65歳ですが……。素晴らしいですよ。

——ハイブリッドですね。

草柳 そうね、ハイブリッドですね。そのハイブリッドを支えるフィロソフィ、哲学というのは大変なものです。ですから、そんな大変なことをやっていく人と、ややこしい事はやらずにフラットにやっていく人とは分かれていくように思いますね。

女性論だからこそ命がけ

——草柳さんは政治、経済、社会論で論陣を張る一方、女性論ものにされてますが、私たちはどちらが専門なんだろうかという考えがちで、正直なところアツケにとられてるんですが……。

草柳 最近同じ質問をたて続けに聞かれたんですよ。「草柳さん、あなたね、『特攻の思想』とか『企業王國論』とか『斎藤隆夫かく戦えり』など書いてるけど、本屋ではその隣りに『お嬢さんこんにちは』なんて本が並んでる(笑)。何やってんですか」と言われる。だから言い返すんですよ。「アナタ、ジキルとハイドを読んだことがないんですか(笑)」。

人間の中には多様化願望があるんですが、実のところ僕にすれば両者とも底のところであつてるんです。今度出した「愛のはじめと終りに」と「斎藤隆夫——」

と、どっちが時間を費しているかといえば、「愛の——」なんです。極端なことをいえば政治、経済なんて鼻歌まじりで書けますよ。しかし女性論は文化を書いているんですから命がけです。二倍ぐらいかかっています。だから他の人も何人か女性論を書いて僕に挑戦してますけど、全部途中でやめてしまった。彼らは女性論だからといって筆を置いたんですよ。僕は女性論だから筆をつかめたんです。同じ、だからなんです。テレビだから投げた話し方をするのと、テレビだから全国誰が聞いているかわからんぞ、どこかの女子高生がその言葉を聞いて人生を決定してしまうかも知れない。人生というのはその二つのだから成り立つ気もしますね。

——「斎藤隆夫——」と女性論の読者を想定しますと、女性論の読者の方が影響されやすいように思われますね。

草柳 そうなんです。本の中の一行で、目からうろこが落ちたとか、「私は何をしていたのか」と夜一人で叫んだとか、そんな手紙を随分いただきます。ですから女性論はとても怖いし、責任が大きいんですよ。「斎藤隆夫——」の読者は人格形成が終わった人が多いと思われませんが、女性論は人格形成途上なんですからね。

そのへんをわきまえないで接するとえらいことになりますね。決して読者からサポートされたいしね。

——神戸に関して御意見があれば伺いたいです。

草柳 苦言を呈したいのは異人館めぐりですね。神社仏閣を参拝するかのような団体客。もしこれが建物だけじゃなく、異人さんまでも含めての見物なら、外国人に対して失礼なことですからね。

いいところはモダニズムですね。神戸女学院のニュートラがその年のファッションを決定したり、キュラソーの木綿の服を着こなすお洒落感覚。産業にしても古くはラムネ、マツチ、パン、コーヒー、最近ではアパレル、流通などに時代の先取りが見られる。このモダニズムを大切に、育てていってもらいたいですね。

1984

あけましておめでとうございます。



ご家族のファッションは 今年もニシジマへ。



● サービス内容 ●

- 型くずれの防止 ● 素材感の回復 ● お客様のお好みに合せた仕上
- カルテの作成 ● ファッション、クリーニングの最新情報の提供



神戸市中央区三宮町2丁目10番7号
ヒューストン101 ☎(078)332-2440

ハイセンスな紳士服で
最高のおしゃれを



三恵洋服店

神戸・元町4丁目 ☎(078)341-7290



●さわやか対談

淡路のロマンに かける初夢

—島と橋とお祭りと—

坂井時忠VS吉沢京子

〈兵庫県知事〉

〈女優〉

兵庫県は、おいしいものの宝庫

吉沢 あけましておめでとうございます。

坂井 やあ、おめでとう。結婚されて初めてのお正月ですね。ご結婚はい、でした？

吉沢 去年の9月28日です。

坂井 そうですか。新婚旅行はどこへ？

吉沢 ニューヨーク経由でバハマ諸島へ行つてまいりました。グアムやハワイとは違った素朴さがありますね。

坂井 まだ観光ズレしていないところですね。本当によかったですね。僕らの年代は、新婚旅行といってもせいぜい熱海ぐらいだったから、本当に隔世の感がありますね。

ところで、京子さんは芦屋にお住まいですが、住みごころはいかがですか？

吉沢 とてもいいところですね。今まで東京の都心で暮らしていたものですから、仕事がなくて家にいても全くおちつかず、休んでいるという感じがしなかったんです。芦屋に来ましてからは、仕事のない時は本当にのんびり

とさせていただいています。景色もきれいです。

坂井 六甲山もきれいでしょ。

吉沢 こういう自然の素晴らしさを今まで見たことがありませんでしたから、感動いたしました。

坂井 毎日、山々の移ろいや瀬戸の海を眺めることができるのは素晴らしいことですね。

吉沢 星がいっぱいあるのでびっくりしたんです(笑)。皆さんが親切で、お買物なんかに行きましても、すごく温かく迎えてくださるんですね。

坂井 芦屋には立派なレストランやきれいなお店がたくさんありますからね(笑)。

吉沢 また、ちょっと足をのばして神戸に来ればお肉がおいしいし。何だか太りそうで心配ですね(笑)。

坂井 兵庫県はおいしいものには事欠きませんよ。

吉沢 このあいだ、但馬へ山菜料理を食べに行つたんですが、すごくおいしかったです。

坂井 但馬の山菜料理は、兵庫県の中でも私が最もおいしいと思うものの一つですよ。

吉沢 お魚もおいしいですね。やはり、日本海と太平洋



の両方に面しているという土地柄でしょうね。

坂井 おそばもおかしいですよ。

吉沢 今、私は朝日放送の「こんなときα」というお料理ショーみたいな番組に、レギュラーで出させていただいているんです。それで、阪神間のおいしいお店を訪ねて歩くんですが、兵庫県って、ほんとうにおいしいものがたくさんありますね。

淡路島で鳴門架橋を記念する「くにうみの祭典」を坂井 食べものといえば、淡路島にもおいしいものが多いろいありますよ。魚、牛乳、牛肉など、ぜひ行ってみてください。

吉沢 義父（コマ・スタジアム社長・伊藤邦輔氏）からも聞いているんですが、淡路に橋ができるそうですね。

坂井 来年、淡路島と四国の間に「大鳴門橋」が完成するので、それを記念して大きなお祭りをやろうと計画しています。今、兵庫県では、県土全体をさわやかな緑に包まれた公園のようにしようという「全県全土公園化構想」を進めているのですが、その一つのモデルとしてま

ず淡路全島全土の公園化を進め、あわせて大鳴門橋の完成を期して島をあげてのお祭りをスタートさせたいと思っています。淡路をもっとと立派な島にして、全国の皆さんから愛され親しまれる島にしてゆきたいですね。2／3年前に、おとうさんの伊藤邦輔さんに、「兵庫旅情」という歌を作っていただきました。作曲がクロード・チャリさんで、八番までなのですが、その一番が淡路をうたっているんですよ。

吉沢 すごく歴史が古い島なのですね。以前、出雲大社の宮司さんとお話をしました時、兵庫県とはすごく密接なつながりがあって、お社なんかも同じようなものがあると伺いました。

坂井 伊弉諾神宮というのがありましてね。昔の格付けから言いますと、官幣大社といって、日本で最も格の高い神社なのです。そこに、日本の国を造ったといわれるイザナギ・イザナミノミコトを祠（ほ）つてあるんです。古事記や日本書紀によると、イザナギノミコトがまず淡路を造ってから、他の日本の島々を造ったということなんです。

吉沢 何となく納得できますね。うず潮なんか見ると、何かが生まれてくるって感じがしますものね。

坂井 来年のお祭りにはね、全国の神官にお集まり願って白装束の衣冠束帯姿で大鳴門橋の渡り初めをしていただくと考えているんです。これは生田神社の宮司さんのアイデアなんです。吉沢 素晴らしいデモンストレーションですね。

坂井 全国から集まっていたただけで宣伝効果も満点です（笑）。また淡路の七福神めぐりを考えられたアイデマンで有名な坊さんは、全国の温泉から1升ずつお湯を集めて、それ

を混合すれば、淡路で全国のお湯にひたることができるという新しいアイデアを出しておられるんですよ。

吉沢 すごい温泉の量になるでしょうね。(笑)

坂井 また、新聞でも報道されましたが、この機会にオーストラリアのコアラを持ってきたと思っています。今、兵庫県と姉妹提携をしている西オーストラリア州にお願いしています。ご承知のように、コアラはユーカリしか食べませんので、淡路ですでに、ユーカリを1万本近く植樹し、準備にかかっているのですよ。

吉沢 かわいいコアラは皆さんに愛されるでしょうね。

坂井 その他にもいろいろなアイデアを持っていますが、おとうさんの伊藤邦輔さんに取捨選択していただいて、「くにうみの祭典」と名付けた素晴らしいお祭りになると思っています。淡路島に古くから伝わっている人形浄瑠璃の常設劇場もつくりたいし、うずしお科学館なども設けたいですね。また、淡路島の1市10町にもそれぞれのお祭りや行事をやってもらいそれに県や各種団体が加わって、大きな行事にしていこうと考えています。そのほか、淡路は非常に温暖なので、東南アジア各地の美しい花々を持ってきてはどうかということ、すでに各国に依頼してその準備をしております。さきに沖縄県庁の方が来られた時そういう話をしたところ、沖縄県花のデイゴはどんな土地にでも育ちやすいということでしたので、デイゴの花をいただいで花畑を作ろうということも考えているのです。

一度は訪ねて欲しい「健康道場」

吉沢 いろいろ楽しい計画がいっぱいですね。淡路は海もきれいですね。

坂井 大阪湾を見渡しても、いま海水浴ができるころはもう淡路ぐらいいしかありませんね。だから、淡路にハワイにあるような美しい海水浴場をできるだけたくさん設けていきたい。そして、きれいなお嬢さん方に素敵な海水着を着て泳いでもらいたいですね(笑)。また、来島

された方には淡路料理を召しあがっていただきたいですね。従来の淡路料理は魚を主体にしていたのですが、この機会に、食べ物の権威者をお願いして、淡路の産物、例えば、牛乳、玉ネギ、海草などを使った新しい料理をあみ出していただき、若い人たちにも喜んでもらえるものにしたいですね。淡路はシンガポールと同じくらいの面積なんです、ここにはまだ知られていない素晴らしい景観がたくさん潜在していますよ。

吉沢 淡路には、絶食療法を行う道場があると聞いたんですが、そこでは全く何も食べられないんですか。

坂井 ジュースが朝10時と午後3時に出るほか、水は飲み放題です。1週間で7〜8kgは痩せますね。風景が素晴らしい、道場もホテル風の立派な建物です。あそこに行くとは非常に快適なので年1回は行くことを楽しみにしているのですが、反面、ふだんいくら食べて太ってもね、あそこに行けばまたスマートになれる、と油断しちゃうんだな(笑)。話は戻りますが、お祭りにあたっては、淡路出身の阿久悠さんに作詩をお願いし、一流の作曲家と一流の歌手によって素晴らしい「淡路のうた」をつくりたい。できれば今年のグランプリを取るぐらいのものと願っています。淡路のイメージアップを歌でやろうということですね。

吉沢 淡路は、本州と四国の橋渡しの場所となつて変わっていきますよね。

坂井 四国のお客さんを全部淡路へ来てもらおうと野心を燃やしています。来年のお祭りでは、全島全土公園化構想を進めると同時に、明石海峡大橋の実現へのステップにしたいですね。私は小さい時、長崎県の五島で育ったんで、島のもつロマンを大切にしたいんです。神戸から淡路へ観光船を出して、うず潮も観れるし、船の中で料理をふんだんに食べられるようにしたらどうかと、今、船会社に楽しいプランづくりを頼んでいます。大鳴門橋にはイルミネーションをつけて、夜になると橋の形がくつきり浮かび上がるようにしたいとも考えています。



これには、環境庁の許可や地元との合意など難しい問題がありますが、ぜひやってみたいですね。

今年は「島」のよさをアピールしたい

坂井 ところで、京子さんの今年のお仕事の予定は。

吉沢 主婦業とお仕事と半々ぐらいの割合なんです。まず、コマ劇場のお正月公演に出させていただきます。「里見八犬伝」の伏姫の役で、橋幸夫さんとの共演です。あとはテレビとか。また、映画があればやらせていただきます。と思っています。

坂井 はりきっているからいいね。理解ある御主人と文化人のおとうさんをもつて幸せだ。

吉沢 義父にはいろいろアドバイスをしてもらっております。

坂井 僕も伊藤先生

とは何度か海外旅行にご一緒しましたが、実に精力的というか、飛行機の中でも常に何か書いておられる。いつも新しいアイデアが次々と湧いてくるんですよ。実は僕も、今年「遣唐船の旅」というのを計画しているんです。若い人たちにかつて遣唐船が神戸の泊から瀬戸内海を経て玄海灘に出、宍粟を通って五島を最後の補給地とし、そこから唐へ渡ったという体験を実際にしてみたいという計画です。僕も久しぶりに五島へ行けるのを楽しみにしています。淡路と五島とは非常につながりが深く、淡路から五島に行っている職人の方なども多いようです。

吉沢 五島はいいところでですね。なんか、島のロマンが今年の夢を実現してくれそうですね。

坂井 日本はそもそも島国ですからね。だから島の長所と短所をよく考えて、これからの国際化時代に備えなければならぬ。淡路の人も島の誇りをもつと同時に閉鎖的、消極的な島国根性を捨てて、大いに解放的になってもらいたいですね。日本人もつと外国との交際を広げていかなければならぬですね。神戸はそういう面では先進都市だし、大いに淡路が学ぶべきものを持っていると思います。もちろん神戸沖に空港を造ることが前提ですがね。また佐渡、隠岐、五島はそれぞれ空港を持っていますし、大きな島で空港がないのは淡路だけなので、何とか淡路にも空港を開きたいという夢も持っています。何か、今年の話題は淡路に集中してみたいですね。今年のあなたのご抱負は？

吉沢 主婦と女優の両立をバランスよくやっていきたいです。私の場合、忙しいとかえっていろんな事ができるんですよ。貧乏性なのかしら？

坂井 忙しくあれこれやっているうちに、いいアイデアが生まれたりするものです。

吉沢 お茶とケーキ作りも習いたいと思っています。

坂井 それにはとてもふさわしいところに住んでおられるのですから、ぜひ、がんばってください。

経済ポケット ジャーナル

★神戸経済同友会の 新代表幹事に米田氏

神戸経済同友会は任期を終えて退任する宮沢茂代表幹事(川崎製鉄専務)の後任



米田 准三氏に、米田准三太陽神戸銀行専務を決定した。

太陽神戸銀行からの代表幹事は51、52年度の奥村輝之頭取(当時副頭取)以来のこと。

米田准三氏(よねだ・じゅんぞう)昭和25年東大法学部卒、同年旧神戸銀行入行、50年取締役、54年常務を経て58年専務。神戸市出身、55歳。

★KFA新理事長に 木口衛氏就任

神戸フアッションアソシエーション(KFA)の理事長が、11年間続いた川上勉氏(神戸オールスタイル会長)から、木口衛氏(ワールド会長)にバトンタッチ



衛氏として働き木口負を述べている。

なおKFAの新役員は次の通り。

理事長―木口衛ワールド会長、▽副理事長―木村豊キムラタン社長、細川数夫ジャヴァア社長、松岡賢蔵パール社長、▽専務理事兼事務局長―田中勇二郎、▽理事―飯田洋三・飯田洋社長柿本公資・伸和スタイル社長、川上勉・神戸オールスタイル会長、高畑明フアミリア取締役、三浦幸衛モードリンド社長、▽監事―小田格夫・金剛商会社長、柏木幸也ジュネス社長。

★鬼塚社長が世界スポーツ用品工業連盟会長に
鬼塚喜八郎アシックス社長が世界スポーツ用品工業連盟の3代目会長に就任し

たことを祝って、12月1日神戸銀行倶楽部で「鬼塚喜



喜びの鬼塚社長

八郎君を励ます会」が開かれた。日本人の工業連盟会長職は画期的な事であり、今後のエネルギーシユな活躍が期待されている。

「神戸にとっても栄誉」と石野信一神商議会議頭、坂井時忠県知事ら120名が鬼塚社長を激励。氏も「ハート対ハートで頑張ります」と応えた。任期は3年。

★神戸を中心に全国の若手真珠業者が集う神戸は、全国の真珠の集散地だが、五年前から若手による「真珠の街・神戸を

考えるプロジェクト会議」が結成され、活躍している。その神戸の若手を中心となつて組織されたのが「若手が集う会」(事務局/高橋兄弟商会)。去る10月22、23両日、草津市で第四回の会議が開かれた。



琵琶湖会議(草津市)での工場見学

「全国の若いメンバーが集つて情報の交換や研鑽をや、業界発展のために何をやればいいのか、を模索中です。神戸がイニシアチブをとって組織化の方向へ進みつつあります」と高橋洋三・高橋兄弟商会常務は、若い仲間の参加を呼びかけている。

★KOBEOフィスレディ★

富樫康美さん(19)

△神戸リッツ△



「おとなしく見えるらしいんですが、本当はおっちょこちょいなんです」と明るい笑顔が素敵。加古川北高校卒、宣伝部に入つて1年半。企業対抗のTV歌合戦で自慢のノドを披露、チャレンジ精神が旺盛だ。「結婚は23才までに」と目下恋人募集中。理想の男性は包容力のある人、俳優では萩島真一。加古川市在住。

話題のひろば

<I>

三代にわたって 真珠振興に尽力

□大月尋男氏の藍綬褒章受賞を祝う



(写真上) 右・大月尋男夫妻と挨拶をする田崎俊作氏。左・喜びの大月さんを囲んで。(写真下) 右・KFMのモデルリストたち。左・神戸の真珠業界の面々。

秋も深い十一月二十九日、神戸ポートピアホテル借楽の間で、日本真珠輸出組合理事長の大月尋男氏(株式会社大月真珠社長)が、昭和五十八年度産業功労者として、藍綬褒章を受賞され、その祝賀会が真珠業界を挙げて催され、約二〇〇人が集った。

世話人代表の田崎俊作氏は、「お父さんの大月菊男氏の代から、真珠業界の振興につくされて、兄の成男氏と三代にわたる功労者ですが、今後も積極的に頑張って下さい」と激励。通産省竹沢産業局長は「日本の真珠の売上げが五〇〇億で、神戸が七七八割を占めているので、ソフト面での貿易摩擦が多いので、ソフトの真珠はぜひ増やしてほしい」と。又、貝原兵庫副知事は「日本一の真珠メッカが神戸で、兵庫県の総輸出の一角をしめているので今後を期待します」とメッセージ。選挙戦たけなわの石井一氏もかけつけて活気あるパーティーとなった。

大月氏は「父の代から三〇年真珠業界で頑張ってきましたが、今日の受章は業界の代表として頂いたものと思います。輸出も好調で健全なあゆみが続け、業界も明るいムードですから、これからも皆さまのお力添えをお願いしたい」と御礼のあいさつ。乾杯は、金井厚氏によって音頭取りが行われ神戸の真珠業界の結束が感じられた。

Inter
Design
'83
Kobe, Japan



●特集●

日本文化デザイン会議'83神戸

神戸人は 知的まつりに 何を感じたのか

11月24, 25日・於／神戸国際会議場他
各分科会出席者による
見たまま・感じたまま

「海は広いか、大きいか」という港町神戸にとっては直接的なテーマで繰り上げられた、日本文化デザイン会議には、両日で延べ約8,000人が参加した。20余のシンポジウムは様々の切り口をもち、迫力あるパネラーの話に神戸市民はインパクトを与えられたが、今後どのように街づくりにいかされていくだろうか。神戸市民が推考していく問題を残して、来年は札幌で開かれる。

神話の海

パネラー／梅原 猛、栗田 勇、山本七平
白杵百合子
ハルボライターV

遅れること数十分。知的興奮が静かに漂う会場に講師到着。滑らかな独得の語り口で知られる梅原猛氏の司会で「神話の海」は始まった。

まず山本七平氏が、「聖書において海の記述はヨナの伝説が唯一である」とヨーロッパ文明と海の結びつきの希薄さを指摘。ヨーロッパ人の海とはキリスト伝播の道であり、かわりには神話的でなく技術的、科学的であることをトットツとした語り口で論理的に述べれば、栗田勇氏は明解な声色で、「日本の神話は、ほとんど海の物語といつていいほど豊富。古代人の海に関する基本的な想いには、海を別世界とみる他界思想があった」と述べ、この別世界とは、海

の向こう天とつながる点にある
“常世の国”。神はその国と人間

界を往復して豊かさ喜びをもたらす信じていられた来訪信仰へと話を広げていった。梅原氏は、浦島太郎新説として「丹後国風土記逸文」を興味深く紹介。浦島は亀につれられ竜宮城へ行ったのではなく、天女と共に「蓬国」に行ったと。「ヨーロッパにおいて海にはマイナスのイメージがあるが、日本においては救いの世界である」と結んだ。

短時間ながら、海を媒体として西洋と東洋、キリスト文化と仏教文化の違いを浮かび上らせた濃密なひと時だったといえる。

帰路ふと心に浮かんだのは、立花隆著「宇宙からの帰還」に書かれてある、宇宙に神の存在を救いの世界を見出した、海をマイナスととらえたヨーロッパ人の子孫たちのこと。とすると、日本人は宇宙には何を見い出すのだろうか。

海のおやかし

パネラー／吉田光邦、野村雅一、松井健、松田 清
山本 芳樹
ハ美術評論家V

幼稚園の園長さんから「最近の子供は海にあやかしを感じないーこれをどのようにすればよいのでしょうか？」という質問が、各講師の話しにあとであつた。これは、まさにショックな発言でした。海に渚が少くなり、海水浴もブルでという現状からすれば、海に親しみ、同時に海に一種のおそれ△あやかし△を抱くという情感が失われつつあるのは当然だろう。かつて海は人間にとって異質の世界で、認識をこえた彼方にある。海へ出ることは常に生命のキケンを感じさせてきた。未知の世界に対するおそれである。その未知の世界を支配するのは人間の力をこえた存在、それを人びとは「あやかし」と呼んできた吉

田氏はのべる。海の「お化け」である。

例えば、江戸時代の絵本に描かれた「海のおやかし」——不知火や舟幽霊、人魚、海ダコ（海坊主）、蟹気楼（海市）などを始め、海の二つの性格、幻想の世界と別世界の妖精の世界（海上他界）での様々な事例とその対応の仕方が、科学の発達と共に移り変ってきたことの話しは、いずれも興味深い。

特に面白く感じたのは、六年前に日本の漁船がニュージーランド沖でつりあげた巨大な「怪獣」の正体は果して何であったのか。写真と残されていたヒゲを調査した科学者の結論も「サメに近いもの」というだけで、依然として謎のままである。科学が如何に進んでも私には「海のおやかし」は生きつづけて欲しい海のロマンである。

海を探る

パネラー／合田周平、坂倉勝海、竹内均、本間琢也

池田宏之助

△三洋電機機械研究所所長▽

「海を探る」という題目で、主に海底活動・資源・エネルギーについての講演を聞く機会を得ました。

テーマは「海」、広大なスペースとエネルギー、資源を、何か我々の生活に取り入れる事ができないだろうか、また海洋都市神戸として、海を広大なインナースペースの一部として有益に利用し得るヒントが何か得られないものかと、期待して参りました。

私は昭和四十五年頃から、サンシャイン計画の推進委員をしてきた者としてエネルギー、資源を対象としたこの企画に参加しました

竹内先生のお話は、アウタースペースから見た地球、海底の移動、水の存在といった大きな話であり、海底での溶岩の噴出によりマングン・ニッケル等の資源が無尽蔵に産出するというお話には非常に心強くすることができました。

また、合田先生からの深海へ潜水しての観察から、人間の生活廃棄物が深海にまで及びつつあるということは、有益な指摘であったと思います。

本間先生からは、海洋エネルギーは非常に薄いながらも、エネルギー源として使用するための有益なお話で、今後のエネルギー開発に役立つであろうと思います。

最後に、竹内先生のお言葉を借りるならば、いずれの開発においても、大規模な開発を進めるには一つの小さなものに成功し、さらに、それが核となって大きなものとなり海洋への挑戦とつながってゆくことを期待したいと思う。

海を拓く

パネラー／菊竹清訓、ジョン・P・クレーパー、大山順彦、佐野雄一郎、藤田健次郎、諸岡博熊

△UCCコービー博物館準備室室長▽

神戸市の埋立事業、海洋構造物の工法比較、海洋牧場などが短時間に述べられ、詳細を聞く時間がなかったことは残念であった。特

に、会場のあるポートアイランドは、先進的な埋立技術と世界的な活用方法を目前にして、講師の諸先生方がその威容に恐れてか論評を避けた嫌いがあった。

さて、ジョン・クレーパー氏の海上都市の提案、藤田健次郎氏の人工島工法の比較説明は、それほど目新しいものではなかった。若干、軟着底の提案が注目された。

本分科会のハイライトは、大山順彦氏の大分県米津湾で実施した鯛の音響給餌システムであろう。理論的には可能であっても、網なしで事業に移すには大変である。特に「タイの気持を察すれば」といった歌詞を発表。音による馴致で海洋牧場を開発しようとする夢とロマンのある発表には、多数の聴衆が感銘を受けた。

海の近未来は、とかく技術論が先行し勝ちだが、神戸市がどのようにポートアイランドで海の文化都市づくりを行っているかを語る時間的余裕を佐野雄一郎氏に与えなかったことは惜しまれる。

「技術ばかりでなく、人間の全環境の側面からそのよりどころを求めたい」と結んだ座長の菊竹清訓氏の言葉は、海上都市づくりのひとつの示唆を与えたことだろう。

ときあたかも、ポートアイランドでその胸像の除幕が行れた。ポートアイランド生みの親、原口忠次郎先生が、かつて、神戸で国際港湾会議を創設した英知を生かしているのだろうか、静かに見続け

ていることだろう。

都市の運命は時代の要請に応じて
創り換えなければ生き残れない。

みなとまちのデザイン

パネラー／馬場蓮道、黒川紀章、多田智満子
恒成一訓、山崎泰孝

佐藤 廉

△元町画廊▽

五名の講師によって鍊り上げられ
取捨選択された、一致した提案
が出された訳ではない。それは
「聞き手」の受け取り方の深淺に
よって未来に向い如何にそれを生
かして行くかはこれからの宿題で
ある。

私にとって特に印象強く共鳴出
来たのは黒川紀章の提言である。
その中の「神戸→異人館と言う事
は」に私も常に感じ共鳴すべき所
があつて「神戸人氣質」として決
して忘れてはならない事がある様
に思われる。それは「異人館」を
過去の名所旧跡として唯人を集め
るための物質化する、また過去の
歴史に依存し看板化するだけで、
その伝統の内に生きた本流を現代
に生かし、将来に開花させて行く
と言うバイタリティが「現代神戸
っ子」にあるかと言う問い掛けで
ある。その事を彼は「異人感覚を
逆に取り入れ、生かして行つて神
戸の過去のバイタリティを再成し
て行く方が今の神戸に取って良い
と思われる」と提言している。そ
れは現代の異人の要素を取り入れ
て、新しい港町を再成して行く、
本来日本民族が兄弟・親子・親戚

で出来る甘えの町が特徴の中で、
異人（隣人の個人関係）の感覚を
生かして都市を造っているのが良
いのではないと言う事である。日本の
生活文化の多方面で過去の「神戸
人」がその進取の気概によって生
みだして来た文化を確りかりと
「現代神戸っ子」は肝に命じて忘
れてはならない。その伝統の本質
の力を發揮し、過去から現代とし
て未来に向つてその本流を継承し
て行つてこそ「現代の港町神戸」
は活気づき、本座談会のテーマで
ある「みなとまちのデザイン」も生
きづいて来るであろう」と言つて
るのだと信する。

まちの楽しさ——環境とアート

パネラー／針生一郎、木村重信、多田美波、
福田繁雄、増田正和

山口 牧生

△造形作家▽

耳がひどく遠くなった。困りは
てて補聴器をつける。つけて驚く
のは、世の中なんと騒音に満ち満
ちているか。人の声も大きく聞え
るが騒音が気になって結局聞きと
れない。そんなつんぼのレポート。
さて台座の上に權威的自己顯示
的な彫刻がおしつけがましく立て
られるのは困るということは、各
講師の一致した見解だ。共同制作
により無色透明な環境造形を模索
（増田）、建築とか都市計画とか異
った分野との協力から新しい造形
のひろがりが生れる（多田）、笑い
やウィットの商品が、それに気づ
いた人にそつと手渡すやさしい心

（福田）、加工を抑えアレンジメン
トに重点を置く造形は、ニュート
ラルでありながら環境とひびき合
つて新しい個性をもつ（木村）、作
者と市民が対等に話し合つて構想
をすすめるべきだ（針生）、等が説
得力をもつて語られた。

さらに、アートは都市活性化の
起爆剤たりうるという木村説は、
アートの非力を痛感する筆者に衝
撃を与え、マスタープランから
出発して整然たる都市計画を
実現する時代は終つたとする針生説
が興味深かった。

補聴器を通して聞える都市の騒
音もさることながら、色彩と形も
新奇をきそつてわめきたててい
る。視覚的騒音。そういう都市の
現況を思う時、神戸は陽当りのよ
い街（陳舜臣）神戸はおいしい街
（堀内正和）といった触覚的な捉
え方が楽しい街づくりのきわめて
大切なポイントであることがわか
ってくる。

シーフード

パネラー／大高猛、小川忠彦、坂根 進、
玉村豊男、近松文子

朝比奈千足

△指揮者▽

微かな期待が最初にあった。テ
ーマが「シーフード」、おまけにサ
ブタイトルが「海を食べる」。そし
て講演前には、ちらつと白い背高
帽子のコックさんの姿。これはひ
よつとしたら、生ガキクラゲの
合えものなんかが試食、なんて勝
手に想像していた。パネラーの中



記念講演中の陳舜臣氏



宮崎辰雄神戸市長



板井時忠兵庫県知事



梅原 猛氏



大島 浩映画監督



月岡清市神戸J C理事長



グラフィック・デザイナーの横尾忠則氏



〈みなとまちのデザイン〉のパネリストたち

にあの、小川忠彦さんの名前があったので、それを期待していた人はボクだけではないはず。

おはなしが延々二時間余。オイシシーなスライドの連続。昼食時大急がしでザルソバをかき込んでおいてよかった……。

諸先生方の「食べ物雑学」的な内容の話の中で、流石小川先生、専門家の、プロフェッショナルな語り口にボクは一番興味があった多少この「シーフード」というテーマから離れた、料理の技術の基本的な考え方を、素人には何となく判ったような、そうでないような言い方で解説された。なにしろ「素材の持つ味の集中と交換」ですから。料理学校の生徒さん達こんな難しい事を聞きながら、エビフライやサケのバター焼を作っているのかしらん。アッ失礼！ パター焼ではなくて「ムニエル」でした。だから素人は困る。

それにしても、ボクのようなイジキタナ者にはとても残酷なことを小川先生は、あの丸顔をニコニコさせながら平気でなされる。やっぱりコックさんが「イトヨリ」の料理の数々をワゴンに乗せて運んできた。ボク達はそれをただ見るだけ。臭いもかぐことができなかったのです。

ザルソバじゃなく、天ぷらソバくらい食べておけばよかった……。

関西は文化の胃袋だ

パネラー／多田道太郎、上田 篤、横尾忠則

長島 隆

△神戸地下街副社長▽

多田道太郎教授は、独特の埋立文化論を展開するに当って「関西」の三都市、京阪神のうち京都を除外すると前置きされ、大阪・神戸を対象の区域として話をすめられた。埋立／人爲および自然の作用も含めて「文化論」という以上、

ていたマッチのラベルの魅力が幼児体験として意識下に深く沁みこんでいた」と話しながら、古い輸出用マッチのラベルと自分の作品とを交互にスライドで写しながら語られた折には、さてこそ、という感じがした。

映画を通して見る異文化の交流

パネラー／大島 清、大森一樹、川本三郎、高野悦子

三村 照雄

△神戸シネマハウス代表▽

11月24日、兵庫県農業会館の大ホールにて、ポルトガルのパウロ・ロシヤ監督の「恋の浮島」そして大島渚監督の「戦場のメリークリスマス」の2本の作品の上映に引き続き、PM7時すぎより、百名あまりの聴衆を前に、「異文化の交流」をテーマにシンポジウムが行なわれた。司会者から映画を通して観る異文化の魅力を提起した。大島監督からカンヌ映画祭で話題を独占した「戦メリ」作品を通じて、異った文化に魅かれる人間を描き、若い女性から支持を受け、人々のナイーブな気持に驚いた。高野悦子は満州の内陸育ちの私には、海は特別の意味を持つ、パリ留学を通じて、鉄砲の伝来に興味を持ち、ポルトガルの港から「日本」をみたとき、遠い日本が私の心の中で近くなった。モラエスの伝記に魅かれ、15年を費やし、映画を完成させた。

このあと横尾忠則氏が「私の作品のルーツはマッチのラベルである。もの心つく頃から身辺に溢れ

は異文化というより、同質文化として注目し、京都に住む外人は同化しようとするが、神戸に住む外人は自国に住むときと同じ、ライフスタイルを守り続ける。「恋の浮島」は神戸的外人であり、「戦場のメリークリスマス」は京都的外人である……。

川本三郎から日本デザイン会議のテーマである、海は広いか大いとも自分自身の汲むコップで決まると、自分自身の物さしを強調し、シンポジウムをしめくくった。

海からの日本

パネラー／芳賀 徹、アンドレ・ブリュネ、李 御東、榮久庵憲司

呉 京煥

△神戸大学大学院文学研究科国文学専攻▽

世界の国々を、やや乱暴ではあるが、地政学的に分類すれば、大陸国家、半島国家そして島国に分けることができる。これらの地政学的条件は各々の国に一つの風土的与件を与え、文化づくりに大きな影響を及ぼすようになる。もちろんこのような地政学的条件及び風土だけを文化の決定的要因とすることはできない。しかし住民は常に風土というものととの接点を模索し続けて来たのは確かである。ただその接点の質が問題なのだ。

同じ島でも、英国と日本との文化のあり方は異なるものであり、同じ半島と言っても韓半島とペロポネソス半島とのギャップもちゃんと存在するのを見てわかる。

今回の会議に出席して、得た新しい知識は島国としての日本が常に直面しなければならぬ「海からの日本」というテーマのもつ問題の深さであろう。言い換えれば「海」の持つ意味の変化である。特に芳賀さんがおっしゃった太平洋の意味については新しい示唆を得ることができた。近代以前の日本は、まぎれもなく世界文明の端に存在し、またそれ故に文明の蒸溜庫だったが、近代に入ってから日本は太平洋と一つ一つの海を獲得することになる。この新しい発見によって今までの日本のあり方は、転換期を迎えるようになるとの認識だと思われる。ユーラシア大陸の文明を溜め続けてきた日本は、今度は逆に西欧の文明をアジア大陸の方へ注ぎ込みはじめたのである。日本の場合、こういった文明の経路にはいつも「海」という条件が働く。つまり、日本が両翼の海といかに接していくかという質問は、このまま「日本人とは何か」という質問でもある。

海の門、オーシャンゲート

パネラー／渡辺豊和、栗田 勇、村松貞次郎
名生 昭雄
△神戸市民俗芸能調査団団長▽

主に民俗学的なアプローチの仕方です。「海の門」について話が展開された。神社を中心とする祭祀遺跡をたどり、そこから遙かなるわが祖先を海洋漁撈民族として扱った渡辺豊和氏（建築家）、「門」を

価値観の転換と把握し、「海」を外來文化摂取のメカニズムとする見解を示した村松貞次郎氏（建築学者）、「門」を異質の交流場所、「海」をもう一つの世界（他界）とみた栗田勇氏（美術評論家）の三氏がそれぞれの立場での意見交換は問題提起としては興味ある内容で成果はあった。だが、現代における生活文化面での視点に欠ける一方で、遺跡・神社の分布の取り扱いにしても編年的な視点を欠き歴史的な見方を疎んじているように思えた。また、柳田民俗学・折口民俗学の範疇での討議にとどまり、わが民族の歴史的階層性に触れなかった点ももの足りなさを覚えた。

世界の海洋民族のもつ共通性と異質性といったような点から比較民族学の視点をもっとうち出すべきだったろう。

村松氏の「文化のかくし味」ということばは印象に残った。魅力ある文化には伝統文化に外來文化を加味してあるのだという見解である。

「分析的な社会の中では、他界との交流が必要」であるというまとめも「海の門」というテーマに即して充分に首肯し得るものであった。私としては、二時間二十分の時間が短かくさえ感じた。

地球をめぐる

コミュニケーション近未来

パネラー／合田周平、後藤和彦、坂下 清、式場 英

鈴木 謙一

△鈴木歯科器材社長▽

このシンポジウムを通して、新しい情報化社会は、「メガトレンド」の著者、ジョン・ネイスビッツの指摘する「ハイテク・ハイタッチの共存」にしばられることが浮きぼりにされた。

シンポジウムは、INS（高度情報通信システム）や、キャプテン・システムの解説を画像を通して行なうなど、参加者に親しみのもてる形で進んだ。情報伝達が、電話に象徴されるように「耳型」から「目型」に転換しつつあること（式場氏）、放送は、「地球をめぐるコミュニケーション」として発達したこと（後藤氏）、明日のホームエレクトロニクスは、バイオリンの在宅学習などマン・ツーマンのふれ合いを促進する（坂下氏）——など各論者は、それぞれの専門的立場に根ざした近未来展望を示した。

問題は、ハード先行型のニューメディアへのアプローチをどう判断するかにある。このシンポジウムでも、潜在的なニーズを引き出すという積極的評価もある反面、「使う主役は人間」、「情報は人間の感性に働きかけてもたらされる」（合田氏）と、ソフト固めの重要性も指摘された。

テレビ会議、テレビ電話、ビデオテックス・サービスなどハイテクな道具立てが進歩するとともに、人間のふれ合いを大事にする

ハイタッチな側面も一層重視されるようになる。その意味で新しい情報化社会は、道具立ての画一化が進む半面、人間の生活スタイルの個性化も同時併行的に進む社会と考えたい。

コンピュータ・グラフィックスとコミュニケーション

パネラー／河原敏文、東 豊彦、英 憲悦
斉藤 智

△現代美術作家▽

テレビ空間が拡がり、日常空間がそれだけさまなってきたとパネラーの河原氏は指摘していたが、まったくそのとおりだろう。子供達のテレビゲームへのめりこみなどはそのはなはだしい姿である。多かれ少なかれ私達はテレビをとおして世界の拡がりを把握している部分を考えないわけにいかない。

テレビコマーシャル等にコンピュータ・グラフィックスがどれほど導入されているか具体的な作品で大分見せてもらった。そのあと自宅のテレビでコマーシャルを見るとタネがみえて面白い。ビジュアルの世界にどれほど厚みをもたせているかということ、そして今後が特に楽しみである。現代のアートとして後世に残るのはもしかしたらテレビコマーシャルあたりではないかなどと冗談ではなくて、ふと考えさせられてしまう。しかし、一方緻密であればある程（技術的な効用を考えず、美術

的な側面を中心に考えればということ）その精巧さだけが眼につくと、かえってひ弱になりやすいということもある。テレビコマーシャルなどでも頭にこびりついていようなものは存外素朴なものが多くてもわかる。パネラーの東氏も言われていたようにコンピュータを使いこなすということが目標なのではなくて、いかに力強いイメージをつくりだしていくかということなのだろう。ああもつくれるこうもつくれるということではなくて、とんでもないはみ出した何かをずぶとく引きだせるかどうかということだろうが、是非日本のグループに期待したい。

デザインが海を越えたとき

パネラー／永井一正、安藤忠雄、田中一光、山本寛斎、吉田光邦

堀尾 貞治

△造形作家▽

日本人の感じ方見方を大事にする。外に出て日本を見る事。時間と共に朽ちる美しさ。概念を取り去る。本流はくずれ去っていく。

異質文化は流れを作りそこから相互交流がはじまる。「気」というものを解明する。いいものとは庶民のバイタリティーから。単純な方法で大きなスペースが感じられないか。スキマの空間美が日本にあった。コンパクトは日本人のすぐれた生活様式。日本文化はインプットからアウトプットに。偶然から始まり意志による交流が始まる。未知の場所からくるイメージ

の拡大。日本には神と仏が同居している多面的人間像がある。等をテーマに五氏それぞれの立場、仕事をとおして充実した話をされた共通しているわれた事は人間の問題生きていること（時間、時代）がまずあって、その上にデザインも芸術・文化もあるという事。デザインは余分な感情を取り去った具体的な形だけをのこすことで物をよく動かせるのだと思う。同じデザインということでも各人の見方考え方がまったく違ったものになる。意味のないものが重大なものになり日々同じものを見ているもある瞬間からまったく違ったものに見えるはじめる。デザインも生きものとして動き続けていて、今あるものが又新しく我々に限りない方法を示唆し続けている。

海にとりつかれたクリエイターたちは

パネラー／粟津 潔、朝倉 摂、鈴木博之、高階秀爾、田崎俊作

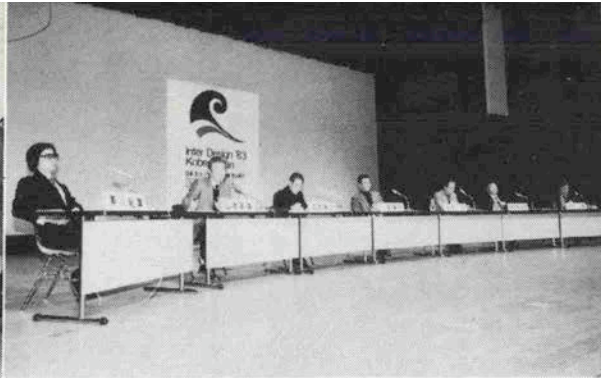
高月 昭子

△建築家▽

海を日常の景色としている神戸市民の一人である私は「海にとりつかれたクリエイターたちは」「いったい何をぶつけてくれるかと興味を持って参加したのだが」。粟津氏をチェアマンとするこの分科



左2人目より河原敏文、吉田光邦、大高 猛の各氏



無料で公開された市民・県民フォーラム



左より永畑恭典、角山 栄、草柳大蔵の各氏



多勢が参加したさよならパーティ



勢いよくカンパイノ



日本文化デザイン会議賞の受賞者たち

会では西洋と日本の海へのかかわり、比較が主で、パネラーのテーマへの歩みよりへの苦心が思われた。田崎氏は真珠のえもいぬビシンの輝きが海の美のエッセンスだと捉え、鯛の刺身の切り口の色合に重ねての語り口や、公害問題も含めて海の手末への視点に共感を覚えた。それは氏の海への深い思いが生る声として伝わってきたからに外ならない。又氏自身も同席の諸氏に他の分野からの問題提起、異った視点からの発言を期待した神戸っ子の一人ではなかったかという思いが残った。鈴木氏の最後の補足発言に「近年日本人の海へのかかわりが従来の融合的なものから西洋に近づいて対立的になってきている」とあったが、実にそこを出発点として話を聞きたかったというのが実感であった。同時進行して描かれた4人の女性による海はあくまで明るく華かで若者の海、リゾートの海というか盛り合せレディスランチというおもむきに出来あがっていた。ターナーやクールベの絵画を引き合いにしての格調高い高階氏の、絵をいかに読むかの見本のような評論と対比してみると、実に「海は人間の心を写し、時代を写す」という抽象的な言葉を具現化してみせてくれた。質問の糸口をつかめない分科会であったと思いつつ車を走らせていると、目前に思いもかけぬ近さで山並が拡がっていた。船に乗らないと得られなかったこ

の風景はまさしく海からの贈りものではと新鮮な感動を覚えた。

港町・文物ロード

パナラー／草柳大蔵、北本正孟、角山栄、

永畑義典、柚木 学

三杉 隆敏

△小原流芸術参考館副館長▽

人間にとって欠かせない塩の話（永畑先生）、東西にわたるお茶の話（角山先生）、灘五郷にまつわるお酒の話（柚木先生）、ジーンズで代表される木綿の今日の流行の背景（北本先生）等々の話を次々と御聞かせいただいた。やさしい語り口でありながら、それぞれ一本の糸が通っていた。それは単なる印象批評ではなく歴史家としての目を皆様が持っておられるということの反映であつたのだらう。

独断と偏見を持って、それぞれ勝手なことをしゃべりそこから何が生れればというのが最初からの狙であるという会議であるだけに、そのばらばらの発表を草柳先生をもつてしても焼鳥の串の如くにまとめ、しかも「海は広いか、大きいのか」のテーマに絞り込むということはどうもむりであった。しかし、横浜生れの草柳先生を始めとし、各先生方の語り口の心地として皆様が良いにつけ、悪しきにつけ、私達の神戸に対する熱い思いと目を持っておられることを強く感じさせられた。

会議の中で幾度もくりかえされた「情報過多」な今日、でも、あのような面白いそれぞれのお話を

もつと多くの人がフランクに聞ければと思った。が、一方で、閉会式でいみじくも吉田先生が議長としての報告の中で「このような会議や学会でいつも問題となるが、これを次にいかに役立てるか？」との言葉、御互舌たらずな空しさがそれぞれの心の奥に残しておられるように私には思えた。

市岡康子が描く「母なる太平洋」

パナラー／牛山純一、スジャ・トモコ、

市岡康子

早川 祐未

△神戸大学建築学科設計専攻・ブラジル日系三世▽

私はブラジル生まれだが、「海女」という言葉は、祖母より聞いていた。日本から送ってもらった絵ハガキ、三島由紀夫の「潮騒」でも知っていた。主人公の女の人（海女）は美しく、絵ハガキの海女達も美しかったので、私は海女は皆、スマートかと思っていたのです。

でも映画が始まった途端、小さな部落から、体格の良い女性達が頭巾をかぶり、頭上に風呂敷をのせ、船に向かう面があつた。陽に焼けた肌は、都会人になく健康さと、自然とともに生きている強さが溢れ、そのたくましさに驚いた。映画全体は普通の西洋映画とちがいが、コメントが多くな、何かモノローグのような感じもあつた。画面では貝を拾うために船と海中を行来する海女が何度も何度も映され、私も海女になったように、海中では息苦しさを、海上で

は空気を一緒に味わっているようで、最後の場面では、一日の作業を終えた海女達のニコやかな顔に、今日も無事に岸へ帰れた……と、ホッとしたものだ。

海女が夫婦で仕事をしていることを、その時初めて知った。海女の胴につけられた命綱とも呼ばれる綱は、海中と上の世界を結び、唯一の綱だ。その命綱を夫が船上で握り、妻の合図で水中にいる妻を上げたり、下げたりする姿は、夫と妻の会話のようで、夫婦の無言の絆が伝わってきた。

映画のディレクターは女性で、女性の目で写した世界を感じた。映画全体に詩のような美しさを感じられ、画面を見る者との一体感が素晴らしいと思つた。

リレー講演会△海を語る▽

パナラー／榎本了庵、糸井重里、その他多数

堀江 珠喜

△エッセイスト▽

こんな気楽な講演会は初めてだ。会場は酒場風にしつらえてあつて従業員こと司会社の糸井重里氏と榎本了庵氏、それに若いウエイтрレスが三人。ここへ、いろんな「客」がフラツとやって来ては、酒を飲みながら好きなことをしゃべって出て行く。「客は他の会場ですでに一仕事済ませた先生方です。ちようど酒場で息抜きするようにテーマにしばられることなく、楽しいおしゃべりが続いた。

ピンクの上着に黒いシャツ、赤と黄のストライプのネクタイ姿は

元氣いっぱい山の山本寛斎氏。対照的な福田繁雄氏——元氣がなさそうだったけど、すごいバイタリティ。ポルトビアのときに「魚のいない水族館」を作ったそうなの。でもまだ日本で「遊び」は通じない。華道・茶道・武道というように、すべて「道」の形態で貫かなければ認められないんだって。そうそう、それで「家元」ができちゃうんですよ。「海」の話はあまり聞けなかったが、きっと「海」は「生み」(つまりクリエイション)に通じるのだらう。だから海の都市、神戸はクリエイティブな街にならなければいけないのだと思う。

それにしてもこの奇抜な講演もやっぱり「日本社会」そのものだ。三人のギャルは黙って酒運び、客のほとんどは男性。これでいいのかね、国際都市の女性達！

市民・県民フォーラム

パネラー／黒川紀章、小泉康夫、田村明、能村龍太郎、服部 正、森本泰好、山本敏雄

服部 正

△松蔭女子学院大学教授▽

みなと町としての神戸文化を論じようというシンポジウム・フォーラムで、午前九時から午後三時まで、休憩を除いて五時間の長丁場も、最後のまとめの頃は時間不足気味になった。

午前中は現状とその問題点について。午後は、それらの分析を兼ねて将来への展望ないし提言という枠組で進めたが、聴衆が次々

入れ替ってゆくので、いきおいパネリスト側も同じ説明をくり返さざるを得なかった。

地元勢にとって海と神戸との問題は、ポルトビア博以来、いわば語り尽されて来た観のあるテーマで、お互いに手の内を知っているだけに論争になりにくい。「中央」の文化人となら白熱的論争をかわす自信はあるが、黒川紀章が司会者にまわっているので挑戦の機会を得られなかった。

近代日本の基幹的な産業構造をになって来た神戸は、それだからこそ巨大な実験都市として、文化の面でも近代の光と影とを集約的に表現して来た。神戸という存在そのものが、いわば日本全体へのカルチュア・ショックそのものであったのだ。それは「みなと町文化」というような「中央文化人」的感覚で絞り切れる矮小なテーマであるはずがない。そうしたズレに対するもどかしさを感じつつ、改めて神戸、我が愛する町を凝視する想いである。

ビジュアルデザインのいま

講師／栗津 潔、勝井三雄、田中一光、永井 正、福田繁雄

榎 忠

△造形作家▽

初めてのデザイン講座会場は200人の若者で一杯である。部屋が暗くなり有名な五人の作家のスライドと聞きとりにくい作家の話ぶりにつられてウトウトと眠たくなってきた。不安が的中してきた。あ

ちこちで船を漕ぐ人が増えてきた。作家の話が終わるたびに拍手をするので目が覚める。スライドが終り、カーテンが開かれ、新神戸駅の山々の紅葉の美しさに気を取られている間に質問の話になっていた。感じではわかるが意味がわからん用語がつぎつぎとでくる。それが今や専門用語でなく日常用語として、ビジュアルって、何かな、広告のことなのか、絵とか写真などを合成したポスターなのかと思っている間に講座は終わってしまった。デザインのもっている悪、都市、田舎の環境を壊す、商売特有の職業によりつくられた、事物の氾濫、広告にかぎらず、兎に角やたら安心していられる時代は、もう考える時期だと思う。この仕事はファッションという軽い事ではすまされない。人間の日常の中にイヤでもドンドン入り込み麻痺させて、平気である事が恐いのである、質問の中に著作権、他人の作品を自分の作品に組み入れる仕事について、作家がこのように言った。自分に元気がある時は良い作品になるが、自分が弱っている時他人の事物を取り入れるとよけい弱くなり、他人も自分もダメになり法的問題になる。こんな時はやらない事だ、デザインもある所ではダメなアートになってきているのだとおそまきながら感じた。創り出すばかりでなく、なくする勇気が今や必要とされる時だと思う。